

水のモラル

—『水と夢』における純粹性と淨化作用—

及 川 馥

1・0 本稿は前回、前々回の拙論を前提にし、ガストン・バシュラールの『水と夢』第六章の「純粹性と淨化作用。水のモラル」を中心に論じたものである。⁽¹⁾

1・1 水の精神的価値の起源は当然のことながら社会的なものである。⁽²⁾ そのことはバシュラールも否定しない。しかしその社会的な価値を大事に保存しているのはむしろ非社会的な孤独な夢想家であることをバシュラールは力説し、社会から孤立した詩人が「その種族の言語に特有のポエジーを保存している」(p.182)と主張する。

「彼らが事物に適用する言葉 (mots) は事物をポエジー化し、精神的な価値を付加するが、伝統から完全に離れることができない範囲でそうするのである。」(p.182)

1・2 もう一つバシュラールのつけ加えることは、そうした夢想や詩の形体と言語をつなぐ物質的テーマの役割であり、「根源的物質がわれわれの夢を秩序づける」(p.182)のだという持論をくりかえしている。

水のような根源的物質をとりあげる場合、澄みきった水を純粹さのシンボルとするようなことは、わざわざ詩人の力を借りずとも、あるいは「ガイドや社会的慣習がなくとも、このイマージュを自然たと思う」(p.182)ことは間違

いない。

だが、意味論的なことばでいいなおせば、デノテーションのレベルにあるシニフィアン≡清水、シニフィエ≡純粋性というほとんど固定的な関係の逆転をバシュラールのいう「想像力の物理学」は当面の目標とするのだということができよう。「ひとは純粋さを夢想することなくは純粋さを^{コネクトル}知ることができない。」(p.183) しかしここであくまでも注意すべきはシニフィアンの役割をはたす水が、物質、実体という多層的構造を有することである。

1・3 一見何の変哲もない清水≡純粋さという関係はほとんど固定的で想像力の入りこむ余地がないように思われる。いうまでもなく「近代的精神にとって純粋な水と不純な水は完全に合理論化されている。化学者や衛生学者が通ると、その後では、蛇口の上に貼られた札が飲用可ということを示す」(p.184) ような具合に、水の純粋性は夢想が不可能と思われるほど知的な整理が行きとどいているのである。

このデノテーションを維持しているのは意識的なレベルのものであるということもできよう。あるいは共通の合意、通念というものもそうした一種の合理論化が基礎にあって初めて成立するのだといえるかもしれない。

1・4 したがって人びとは「海に流れこむ川の河口にも水源にも決して小便をしてはいけない」(p.185) というヘシオドスのテキストに初歩的な衛生思想を読みとる功利的な心理学者に容易に同意するであろう。ではヘシオドスの同じページにある「太陽に向けて立小便をしてはいけない」という禁止事項にはどんな解釈ができるだろうか、とバシュラールは問う。「太陽という父親のシンボルに対する男性の抗議は、精神分析家にはよく知られている。太陽を凌辱から守る禁止令は川も同じように保護する」(p.185) のだ、とバシュラールはいう。「プリミティヴなモラルの同一の規則がここで太陽の父性的権威と水の母性を保護しているのである。」(p.185—186)

このような禁止条項や保護条項は、むしろ人間の心性にひそむ瀆聖の誘いを示している。バシュラールはそのこと

を純粹な水には「無意識に対する冒瀆への呼びかけ」(p. 186)があると逆の表現をしている。田舎で汚された泉があらちろこちらに見かけられるのはその証拠だし、伝説には泉を汚した無作法な旅人を罰する話が多いのだと「母」自然への凌辱の傾向を指摘している。

一方このような純粹さによって挑発される傾向は、逆のケース、川の汚れ、泉の濁りに対する「特別の、説明のつかない、無意識の直接的な嫌悪感」(p. 187)の発生を否定するものではない。これもバシュユールは入夢の衝動と片づけるのだが、瀆聖に対する嫌悪感は、純粹性、ひいては善なるものへの傾向のひとつの発露と見ることができようと思われる。

水の純粹さを保ちたいという欲求とそれを濁したいという欲求の奥深いアンビヴァラントな関係が、純粹な水を純粹さのシンボルとみなす固定したデノテーションを支えていることがこれではっきりする。純粹な水の関係の下に少くとも一つのコンテキストのレベルがあるということが出来る。

1・5 この純粹と混濁の関係をさらに分析してみると、泉の純粹さというものは、つねに「危険にさらされた純粹さ」(p. 188)なのだということが分る。それを心得ているのは田舎の人である。「無味が美味であるような瞬間、身体全体が純粹な水を望むむめたにないような適切な機会に澄んだ新鮮な水を飲む」(p. 188) 無上の快楽は、自然の中ではごくまれな、恵まれた幸運なのである。また水の純粹さは飲用可能性はもちろん、さわやかさ、善良さ、ひいては生命力というような含意も可能である。

それは、汚く濁った、当然ながら飲めそうもない悪い水と比較すれば一層明瞭になる。バシュユールは飲めない水に対し「前科学的精神は——無意識と同様に——形容詞をつみ重さねる」(p. 189)ことを指摘する。「苦くて亜硫酸をふくみ、塩分があり、硫黄質で、またタール質で、嘔吐をもよおさせる」(p. 189)水というような例でもわかるよ

うに、こういう形容詞は飲めない水を前にした洗面の△悪罵▽を含意しているのである。それはむしろ△嫌悪の心理分析▽(p.189)にふさわしい表現なのである。

パシュラールはさらに不純性が容易に△本質的複雑さ▽(p.188)をあたえられることを指摘する。この形容詞の羅列からもうかがわれるように飲めないという質、不純という質は無意識にとって△多価的有害性▽(p.189)をあたえられるのである。

そしてこうなると水の有害性ノシツイテと水の悪マルはもはや同義的である。

「不純な水は意識的な精神にとって悪のたんなるシンボル、外的なシンボルとして受けとられるとしても、無意識にとってそれは能動的な、まったく内的な、まったく実体的な象徴化の対象なのである。」(p.189)

意識・不純な水(外部) ↓ 悪のシンボル

無意識・不純な水(内部) ↓ 悪の実体

という関係が区別される。汚水の多価的有害性が△悪のシンボル▽を支えているのであるが、その無意識における構造はさらに実体としての多価的受容体、いわば負の価値をどんどん受け入れる実体となるのである。

「不純な水は無意識にとり、悪の容器レセプタクル、あらゆる悪に向って開かれた受容体である。それは悪の実体である。」(p.189)

このような実体としての認可をひとたび得れば、不純な水は前稿で検討した実体としてのあらゆる機能をもつことが可能になる。そしてこのコノテーションはいくつもの層をもつことは明らかであろう。

1・6 まず不純な水は単なる容器、受容体としての消極的な役割から、積極的な作用をもつものに転換される。△呪咀することのできる▽(p.188)実体となる。それは不純な水が入ると、たちまちその容器の水全体を汚染するよ

うな現象をふまえているのであろうが、「悪は質から実体におよぶ」(p. 190) 力をもつことになる。

次に量的な次元でもそれは効力を拡大する。「わずかな不純性が純粋な水から価値を完全に奪うことができる。」(p. 190) そこから次のような比喩的關係が成立する。

「絶対的純粋さというモラルの公準が不健康な思想によって永久に破壊された場合、それは透明さと新鮮さを少し失った水によって完全にシンボル化される。」(p. 190)

つまり泉の純粋さがつねに危険にさらされているのも、この悪の実体が強力だからである。

1・7 ここでバシュラールは水の不純性の検討から人間の運命を読みとる水占いの可能性や、濁った水の夢にふれ、不純な夢、「悪を乗せた、重い波の三途の川、泥まじりの黒い流れが眠る人の内側やまわりをめぐる」。そしてわれわれの心はこの黒い色の力学によってかきまわされている」(p. 190—191)と述べている。だが無意識の下部にこれ以上深く下降することはいつものように慎重にさけている。

しかしバシュラールはこの水の善悪二元論のバランスが悪に傾くのではなく、平衡がとれているのでもなく、善の側に傾くのだということを付記し、その証拠に呪われた泉の数が少ない、(聖者の名前をつけた泉に比較し悪魔の名前をつけられた泉が少ない) というセビヨの調査をあげている。読者としてはバシュラールの分析が不純な水にウェイトをおいていただけに、このとってつけたような一節に釈然としないものを感じるが、水の負の価値の実体化が、このあとで正の価値に転換されることを予測させる布石なのだと理解すべきなのであろう。

1・8 水の浄化作用のテーマの合理的な土台は、水浴して身体を洗い、清潔にすることにあるとしがちである。だが清潔さへの配慮が水の浄化作用をうみだすとすれば、「カルフ人たちは汚れた魂を所有するときにはか身体を洗わな」(p. 192) という人類学者の報告が理解できなくなる。さらにバシュラールは英国の人類学者タイラー

Tylor (Edward Bant, 1832-1917) の報告を引用している。

「ベルシャの信心家は（浄化の）原則を極端にまで徹底していて、あらゆる種類の汚れをみそぎによって取りのぞくため、不信心家を見たときには汚れた目を洗うまでになっている、そしてつねに水の入った細長い首の壺をたずさえみそぎができるようにしている。しかしこの国では衛生のごく基本的な規則さえ守られないため人口が減少しているが、多くの人がすでに身体を浸した池の岸で、掬の命ずる純粋さを確保するため、その中に入る前に、水を覆う泡を取りのぞくことを余儀なくされている信者をまだよく見かける。」（タイラー『原始文明』一八七二、仏訳 p. 562）（p. 193）

したがって「純粋な水が価値を付与され、何ものもそれを逆転させることはできないように思われる。水は善の実体なのである。」（p. 193）この価値付加作用は、発生の時点で有効であったかもしれない水浴のような経験の現実的効果とは、すでにレベルの異なった位置に水の価値を上げているのであり、それは不可逆だということである。

さらにバシユラールはドイツの古典学者ローデ Rohde (Erwin, 1845-1898) の集めた例を援用し、流れる水、湧出する水は「原初的には生きた水である。」^{オー・ツイヴァント}そして「この水の生命こそ水の実体にしっかりととりついて、浄化を決定するのである」（p. 193）と明白に言明する。さらにこの関係は「どんな純粋さも実体的である。どんな浄化作用も実体の作用として考えられるべきである」（p. 193）というふうに一一般化される。

こう考えなければ、ほんの数滴の水による灌水式などまったく意味がなくなるであろう。

「したがって純粋な水に対し原初的には活発でしかも実体的な純粋さをもつことをひとは要求する。」（p. 193）

1・9 泉や流れの生命的な力を純粋な水が凝縮してもつから、それを人間は浄化として受けとるのである。この関係は悪の実体化のプロセスとまったく同じである。湧出する泉の生命力への感嘆、渇きを癒やした清水の味、その

ような水に対する経験が、一滴の浄化の水に凝集されているのである。したがって、「浄化作用によってひとは生命力の旺盛多産な、新たに生れかえる多価的な力をわかちもつ」(p.193)のである。その有効な例は『アエネーイス』第六章にある。「コリネウスは純粋な波に浸したオリウの枝を仲間のまわりに三度かざし、軽く滴をふりかけ、彼らを浄化する。」(p.193)

いうまでもなく「水が内密な力を有するがゆえに、人間の内心を浄化できるのであり、罪をおかした魂に雪の白さをふたたびあたえることができるのである。」逆にいえば、「身体的に灌水された人は道德的精神的に洗われたのである」(p.194)ことが可能になるのだ。

1・10 パシユラールはここで物質的想像力の根本法則である小量化の問題を次のように述べる。「価値付加された実体は微小な量でもきわめて多量の他の実体に働きかけることができる。これは力についての夢想の法則である」(p.194)と凝縮された実体の力を規定している。これはしかし善悪両方に可能であることは、すでに見たとおりである。「純粋な水一滴は大洋を浄化するに充分であり、不純な水一滴は宇宙を汚染するのに充分である。」(p.194)

1・11 純粋と不純のこの対立を夢想することは、次の段階として物質的想像力から力動的想像力への移行をうながす。なぜなら「純粋な物質は言葉の物質的な意味で八光を放射する」、つまり純粋性を放射するからである。また逆に純粋性を吸収することも可能である。このとき純粋な物質は純粋性を「塊に集めるのに役立っている」(p.195)力と化した純粋性、光のように純粋性を放射する存在とは、精神の働きそのものの比喩的表現ではないかとさえ思われてくる。ここではもはや機能と化した実体が、力動性の要素となっている。それは実体としての純粋な水のあらゆる効力をそなえつつ、物質性を極限まで希薄にした存在であるといえよう。

これは水という純粋さのシニフィアンが透明になりまったく機能的になってシニフィエと一致したというふうに捉

えることができるように思われる。そうすれば、力動的想像力も、従来のシニフィエを新たにシニフィアンとして共示的に捉える試みとして位置づけることができるのではあるまいか。

1・12 バシユラルはアベ・ド・ヴィラル *Yabé de Villars* の『ガバリス伯との対話』 *Entretiens de Comte de Gabalis* を援用しつつ、この力としての純粋性の存在を考察する。ガバリス伯は宇宙にさまよう精霊たちを喚起するには、精霊と対応する元素を浄化すればよいと考えたという。この浄化とはまさに水の純粋化のみたプロセスであり、あらゆる元素は純粋化、浄化が完全におこなわれれば精霊〔エッセンス、精、精気、靈魂〕になると化学的に考えたのである。

したがって「八元素を元素から分離することが√できるようにするやいなや、精神の精霊と物質の精霊との間に血縁関係が回復する」(p.196)ということもおこりうるであろう。

こうした考えは、フランス語のエスプリという語の多義性によるところも大きいと思われるが、物質的想像力はこのように物質と精神の間に類似性をつねに追い求めているゆえ、両者の純粋性の極限におけるその血縁関係はいわば当然のこととして回復されるのである。

「精神の精霊は物質の精霊である」ということも可能であり、形容詞から実名詞に移って、「元素的精霊は元素になった」(p.197)ともいえる。その反対に「物質的想像力にひとが完全にしがったとき、元素的な力として夢想された物質は精神や意志となるまで高められるであろう」(p.197)ということも可能になる。バシユラルの指摘したこの純粋な本質における物質と精神の可逆性こそ水の浄化作用のモラルを支える最大の原理である。

1・13 バシユラルは水の純粋さと共に、水のさわやかさ *fraîcheur* の効果についても分析をおこなっている。若返りの泉、不老回春の泉の隠喩は複雑な構造をもつが、バシユラルは精神分析的な領域にあるものは除外した

上で、いくつかの特色をあげる。この泉は「明らかに身体的な感覚であるさわやかさが、その身体的基盤から遠ざかった隠喩となった」(p.197)ものだろう。

1・14 さてバシユラルは水のさわやかさの例として、毎朝洗顔する水を分析の対象とする。

まず冷たい水と眼の出会いである。冷水により目ざめた眼が活気づく。「さわやかな水は視線にふたたび焰をあたえる。」(p.198)「これが水の凝視の真のさわやかさを説明する倒置の原理である。」(p.198)したがって「涼しくするのはこの視線の方なのである。物質的想像力によって水の実体に本当に参加すれば、ひとは新鮮な視線を投影するのである。」(p.198) 外界の新鮮さは、いうまでもなく視線の新鮮さ、内面の新鮮さの投影であり、内心の表出なのである。

内面の価値の分与により、水はさわやかさを獲得するのだともいえよう。バシユラルはこの体験が回春の泉を毎朝準備するのだと考えている。

1・15 第二に、回春の泉には治癒への願望が結びついている。これは力動的想像力と物質的想像力と両面から考えられる。

物質的想像力には、すでに見たように「病人の病氣と正アンティタイプ反対の効果を水にあたえる」(p.199)傾向がある。つまり「治癒への願望を投影し、同情してくれる実体を夢想する。」(p.199)

一方、力動的想像力は「エネルギーの覚醒による治癒の最初の証拠を泉に求めに行く」(p.200)、それは何よりも「水が新鮮で若々しい実体によってわれわれ自身がエネルギーで溢れていると感じることを助けてくれる」(p.200)からである。

つまりこのアナロジー、あるいは単純な共鳴作用ともいえるような泉の力には、人間の神経の中樞をよびさまし、

ふるいたたせる道徳的・精神的な要素がある。

1・16 このように「純粹さとさわやかさは特別な歡喜をあたえるために協力する」のであり、換言すれば、「感性的なものと官能的なものが一致して道徳的・精神的な価値を支える」(p.200)のである。しかし結局これは八青春の倉庫Vともいうべき八内奥の追憶Vに結びつけられる。だからこの水の夢想の中に没頭すれば、必然的にその道をたどることになり、「元素の植物的なしかも元氣回復の生命力」(p.200)の働きのしたがることになるのである。

1・17 こういう体験をした場合はじめて「回春の泉の実体的特性を実感できる」(p.200)し、「誕生の神話を自分の夢の中に再発見し、また母性的機能としての水、ユングが示したような死の中で、死をこえて人を生きさせる水を再発見する」(p.200)とバシュラールはいう。

これはわれわれがすでに見た水の中の死と生の問題に直結する。回春の泉とはあくまでも夢想の力によって生命をもつのであり、これを下手に合理化して失敗したのはルナン Renan (Ernest, 1823-1892) の劇作『回春の泉』なのである。

1・18 さて水の浄化作用は、典礼と自然という一般的問題の特殊個別的なケースである。

「典礼は自然の秘密を見通し、人間の魂の中にあるのと同じ潜在的な能力が自然の中に眠っていることを示す」(p.202)と「エルネスト・セイエール Ernest Sellière のことばはまさにバシュラールの思想を代弁している。バシュラールはセイエールの考えを八水の実体的悪魔化Vということばで要約している。こうした立場から見れば、「罪ある魂はすでに悪い水である。」(p.202)となることは明らかである。

「水を浄化する典礼的行為は人間の中で対応する実体を浄化の方に向ける。そうすると、物の中心における悪とも人間の心の中の悪を、自然全体の悪を、根絶やしにするという欲求、すなわち 同質的浄化のテーマが見え

コンシユブスタンシエル

つぐむ。」(p. 202)

このように考えるなら、つまり物の浄化⇄精神の浄化という相互的關係を通してみるならば、典礼や倫理という問題も大きな実体のコスモスの中にあることが分るのであろう。

1・19 このような効力をもつ純粋な水、実体としての水、即自的な水は「ある種の想像力から見ると根源的物質」(p. 202—203)だと思われる。つまり△実体の実体▽である。たとえばボール・クロードルにとって真の本質的な水、△実体的に宗教的な水▽(p. 203)は、大地の中にあり、その地下の湖は一種の△地下の天▽をなしている。

彼にとって地下の湖、内面の水は△汚染した水の上澄みの水盤▽であり、「その存在だけで巨大な都市を浄化する」ものであり、「その単独な実体の内面性と永続性においてたえず祈る物質は修道院」(p. 203)のようなものである。

このような特異な神学はたとえ物質の浄化⇄精神の浄化を中心にして組織された体系としてコスミックに構想されたものであるとしても、この両系列を支える善なるものへの壮大なる意志の存在を想定せざるをえないように思われる。

バシュユールは「生れながらにして、偉大な詩人は、深い生の中にその自然な場所をもつさまざまな価値を想像する」(p. 203)というだけにとどめるが、それはやがて民族の価値、社会の価値のすばらしい表現となるという冒頭の考察に暗に呼応していることはいまでもあるまい。

註

(1) 「バシュユール『水と夢』における「実体の問題——物質的想像力と実体の構造——」『茨城大学人文学部紀要』(人文
学科論集)第十六号昭和五八年三月。

『水と夢』における愛と死と物質の問題——物質的想像力の構造(Ⅱ)—— 『茨城大学人文学部紀要』(人文学科論集) 第十七号昭和五九年三月。

- (2) この点についてはロジエ・カイヨワ『人間と聖なるもの』 Roger Caillois, *L'homme et le sacré*, Paris, Gallimard. 1939 をバシユラルは参照し、おおむねその社会学的な考察を認めていたのではないかと思われる。